

# 第二次世界大戦直後の新教育

「生活单元学習」－神戸大学発達科学部附属住吉小学校－の開発(2)

横 山 ひ ろ み

New Education Immediately After the Second World War

－Development of “Seikatsu Tange Gakushū” at Sumiyoshi  
Elementary School Attached to Kobe University－ (2)

Hiromi YOKOYAMA

## 要 旨

第二次世界大戦終了直後から、全国で新教育が模索された。その中で、神戸大学発達科学部附属住吉小学校により開発された「生活单元学習」について、その内容を現代の教育改革との関連もふまえて考察する。

私は前論文<sup>1)</sup>において、第二次世界大戦終結後の混乱期の中から沸き上がった新教育理念のひとつとして、兵庫師範男子部附属住吉小学校（現神戸大学発達科学部附属住吉小学校）において実践された「生活单元学習」について考察した。それは、次の様な順序で行われた。

1. 附属住吉小学校の沿革 — 概略, いかなる使命を持ち, 伝統的経過を歩んだ学校であるか。
2. 第二次世界大戦直後の GHQ (連合国総司令部) の CIE (民間情報教育局) による日本民主化政策と日本政府の対処 — 占領下の附属住吉小学校の教育を理解する背景を知る。
3. 附属住吉小学校の敗戦からの立ち上がり — 焦土の中から, 現実の子ども

を見つめて、自発学習、生活単元学習を実施していく苦闘の経過を解明する。

#### 4. 社会科の創設から、「生活単元学習」へ

— 特に新教科における社会科の受けとめ方、新しい人間形成、従来の教科学習への批判、総合学習、「生活単元学習」へ到達する過程、学習の根本的立場の確立を考察する。

この過程において、敗戦の焦土に立ち、世の中が精神的空虚感に充たされている中であって、何よりも先ず、「子どもを大事に」してやることに主眼を置き、「児童の生命の理解と尊厳性への信仰」が説かれたのであった。

それは従来の、子どもにいかに学ばせるか、いかに理解させ、知識を身につけさせるか、といった「学ばせ方」の研究から視点を変えて、いかにして、子ども自らが学びに向き合うことができるか、という「自発」を生み出させる、「自発自展の態度を養う教育」の探究であったといえよう。そこで求められるのは、子ども自身が生きている暮らしを見つめ、日々の生活を自主的に、実践的に、知識を利用して切り開いていく能力の育成であった。こうした実践的かつ創造的生活人をめざすためには、何よりも先ず、「生活」に基盤を置いて、「自主的」に学ばせることが必要であった。こうした、「生活中心の総合学習」としての「生活単元学習」が考察されたのであった。

この学習の根本的立場は、次の通りである。

1. 生活すること自体、経験そのものに目的と価値を求める。
2. 社会科と理科を中核としたコア的色彩の強いものである。
3. 生活単元学習は、社会科教育の趣旨をより効果的に生かすものである。

こうした意味で、「生活単元学習」は当時創設された社会科と深い関わり合いを持つことになる。よって、次に社会科分野における附属住吉小の研究展開について考察し、次の順序で論述する。

1. 「全国社会科研究協議会」での附属住吉小の発表—社会科実施1年余の時期に、「生活単元学習」の研究を発表した。その内容と先駆的活動を考

察する。

2. 「コア・カリキュラム連盟（コア連）での活動——コア連機関誌『カリキュラム』創刊号には、附属住吉小の実践とともに、附属明石小のコア・カリキュラム「明石附小プラン」の全国発表の記事も報告された。この点からも、兵庫県の実践の全国への影響とともに、コア・カリキュラム研究の課題を考察する。
3. 「近畿新教育実験学校協議会（K.T.S.A）」における活動——附属住吉小が兵庫県新教育推進の中核校として、附属中とともに、K.T.S.Aのメンバーとして、CIEより参加指定を受けた。その10年間に迫る。
4. 終戦後の附属住吉小の実践に学ぶ——今日の教育的課題との関連から、附属住吉小の実践研究が示唆する問題点をとらえる。

（以下、文中傍点筆者）

## 第1章 「全国社会科研究協議会」（昭和23・11・4～6 於奈良女子高等師範学校）での附属住吉小学校の発表

### 1. 社会科の創設、実践の試み

この社会科協議会の主催者は、「社会科教育研究社」と、「奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会」である。前者は、東京において『社会科教育』誌を出版する会社である。後者の「学習研究会」をまとめたのは、奈良女子高等師範学校附属小学校主事の重松鷹泰氏であった。重松氏は、文部省において新教科として社会科の創設にかかわった。氏は、創設した社会科が新教育の中核となって、日本の民主化を推進できるようにと願い、これを現場に根付かせる責任を感じていたのではないだろうか。その方法として、氏は、占領下でアメリカの教育をそのまま真似ることや、文部省で制作された社会科をそのまま実践することを強要したのだろうか。

重松氏は、奈良へ赴任した時のことを次のように記している。

- 奈良に赴任するに当って、わたくしの考えたことの一つは、「学・習・指・導・要」

領」本来の姿は、現場の教師自身を主体とし、これを学者や役人が手伝って作り上げるものである。わたくしたちが戦後急拠つくったものは全くの変態であって、現場の教師によって検討され、つくり直されねばならない。現場の教師の先頭には、奈良女高師附小の教師のような人が立つべきである。こういう考えを実現しよう、ということであった。

- 先生方は、わたくしが社会科の学習指導要領の編纂に当たっていたので、社会科を中心とする教育を要求すると思っていたようであるが、わたくしはそうではなく、現場教師の手で学習指導要領をつくること、奈良の伝統を生かした学習指導要領をつくって欲しいのだということを懇々と説明した。疑惑を解き不安を払いのけた後、その具体的計画を考えたが、わたくしは各種能力指導系統表なるものの作製を提案した。<sup>2)</sup>

重松氏は、自前の教育として、「奈良プラン」を作成した。それは、「人間として強い人間」の育成をめざした、〈しごと〉〈けいこ〉〈なかよし〉の三鼎足から成る教育方法であり、早速実践に移された。(昭23・9・1)さらに翌年(昭24・5・10)には、「奈良プラン」を、『たしかな教育の方法』として著し、出版された。<sup>3)</sup>その内容は次のようなものであった。

1. 私たちのねがい
2. 教育計画の立て方
3. 学校のすがた
4. 「しごと」の指導計画表
5. 各種能力指導系統表

また文部省より、東京高等師範学校附小、東京第三師範学校附小と共に、「生活カリキュラム構成」の実験学校を依頼され、その成果は『生活カリキュラム構成の方法』<sup>4)</sup>として出版された。

## 2. 「全国社会科教育協議会」の趣旨と発表校

わが国において社会科が実施されたのは、昭和22年9月1日であり、この協議会はそれから1年2カ月後に発足した。文部省は、昭和23年9月15日に「小

学校社会科学学習指導要領補説」を発行し、社会科の具体化について支援を行っていきが、現場においては専ら、カリキュラム作成に追われていた。それまでにカリキュラムを著書として発表していたのは、「桜田プラン」(昭和22・10)と、「川口プラン」(昭和22・10)であった。昭和24年に入ると、続々と次のようなプランが発表される。3月「明石プラン」、5月「奈良プラン」と「新潟プラン」、7月「北条プラン」と「本郷プラン」、10月「福沢プラン」と「豊島プラン」の出版である。

このように、全国社会科研究協議会を奈良で開催した昭和23年は、全国各地でまさに完成しようとしていたカリキュラムの結実中であつたといえよう。そして協議会は、各地、各校の要望に応えるものであつた。協議会での発表校は次のとおりである。

- 「我が校の生活単元学習計画」兵庫師範男子部附属小学校 斎藤武人
- 「新教育の構想——奈良プランの要項」奈良女子高等師範附属小学校
- 「晩成プランの原理とその実践」奈良県八木町晩成小学校 庵戸英仁
- 「作業単元設定についての一方法」長野師範女子部附属小学校 上条為人
- 「グループ学習の成果を如何にして全体に及ぼすか」岐阜師範男子部附属長良中学校 磯邊喜一
- 「共同学習に於ける諸問題」堺市立榎小学校研究部

なお「要領資料」に「社会科学学習指導の基本形式」京都市朱雀第六小学校 小野為三が追加された。

参加者は食糧難の中でも、1200名(限定)が参集した。奈良女高師附小の重松主事、重松氏の後任として文部省で社会科を担当した監修官、長坂端午氏、東京文理大学助教授で、コア・カリキュラム連盟副委員長の梅根悟氏、中央教育研究所員の海後勝雄氏らも参加し、講演、指導を行った。なお、重松氏、長坂氏、梅根氏の3人は、東京文理大学創立時の第1期生であり、戦後新教育の開拓に協力して努めていた。「発表要項」は、社会科教育研究社の山崎喜与作氏によって編集された。<sup>5)</sup>

### 3. 「わが校の生活単元学習計画」 斎藤武人氏と大玉一実氏の発表

#### (1) その構想と構成手順

教科カリキュラムによる教育では、今日要請される人間は形成されない。

1. 社会的資質を身につけ、社会改造への積極的な能力を持った人間が形成されなければならないが、学科体系に基盤を置き、生活そのものを分析抽象した教科学習の方法では、有力な効果は発揮できない。
2. たとえ教科学習に於いて、いかほど生活化に努力したとしても、国語や算数等の基礎的能力は身につくかもしれないが、総合的な生活力を持った人間への形成にはならない。
3. 「真に身につけ、積極的实践力を培う」教育は、児童の自主的学習活動を通して出来ることである。自主的学習が出来るためには、児童の興味・欲求に添う学習でなければならない。教科学習で興味化を努力し、意欲の喚起を工夫しても、教科そのものの本質に於いて真の自発、自主的意欲が燃え上がらない。

生活人間形成は、生活そのものの学習で行われなければならない。実践人間の形成は、自主的生活経験によってなされねばならない。——ここに我々は、生活カリキュラムへの革新を企画するものである。

学校が生活人間、実践人間形成をめざして、生活経験カリキュラムへと進んだ理由を示している。従前の教科カリキュラムでは人間形成に問題があると説いたことは興味深い。

21世紀に入った今、教育改革を行うに当たって、「総合的学習の時間」が創設された意図と重ねて吟味する必要がある。

次に、「生活経験カリキュラムの構想」について考察する。これは、生活単元学習を中心学習とし、これに基礎学習を併せ置く形式をとる。基礎学習では「国語、算数、技芸、音楽、体育」を設けたものである。

#### 1. 生活単元学習

- イ. 従来の合科学習や統合学習のように、教科・教材を結びつけるものではない。そのような立場を根本的に捨てて、生活そのものを学ばせようとする。

る。

ロ．生活総合学習である、然し在来合科的なものをも総合学習と称したが、それではない。「イ」の通り。なお在来では多く組織的計画的ではなかったこと、過度に児童興味に流された点などで相違する。

ハ．社会科学習を自然の姿で拡張し、従ってその中に自ら国語的・数理的・技芸術的方面を総合的に含み、その方面の基礎能力の陶冶も学習中に織り込んでいく総合学習である。

ニ．特に社会科と理科方面が全面的に自然に織り込まれている。基礎的能力方面として、国語的・数理的・技芸的方面がなお生活学習以外に学習する必要があるが、理科的方面は全面的にここで行う計画である。小学校の課程として特に理科的技能を取り出して学ばせる必要はないという見解である。

## 2. 基礎学習

生活単元学習中で、総合的に学ばせるだけでは、基礎的能力の陶冶面で練習不足、拡充不足、論理的系列の面での不備が生ずる。単元学習中に行おうと欲ばると、学習の流れが中断するから、取り出して学ばせる必要がある。「反復練習と、拡充と、系列的付加」の3方面の必要を充たすために、基礎学習を生活単元学習に密接不離な関係に於いて併置するようにした。そしてその分類法としては、「国語的方面、算数的方面、技芸的（図工・家庭科）方面・音楽的方面・体育的方面」の分け方を採った。申すまでもなくこれ等は、在来の教科や教材とは別個のものである。

## 3. 自由研究

生活単元学習と基礎学習は、いわば共同学習計画である。勿論その間で個別学習が行われるのであるが、個々の児童の能力を一層伸ばし、意欲に一層満足を与えるためのものとして、自由研究の位置づけをする。

我が校のカリキュラムは、以上の生活単元学習と、基礎学習と、自由研究の3つで、それが一貫的統一的計画として構成されているのである。

このように附属住吉小の終戦直後のカリキュラムは、生活単元学習を中心学

習とし、周辺に基礎学習、自由研究を併せ置く形式を採るものであり、コア・カリキュラムに属するものであった。

カリキュラム構成の手順としては、6つの過程をとった。

1. 生活領域分類 2. 教育目標設定 3. 児童発達及び要求調査 4. 教科的基礎能力の抽出 5. 生活単元選定と学習計画 6. 基礎学習生活 である。

社会科実践の1年間を経て、「真に生き生きと自己の生活を向上させる活動性に乏しい」と反省。「真の社会生活・児童生活を生活させ、その課題を自ら解決する立場に立って学習が進められるように」と、「活動カリキュラム」を構成した。児童の切実な要求・興味・目的に出発を置いたため、成功に向うのである。

ここで、「生活のための活動カリキュラム」の方針について検討することにする。

「生活のための活動カリキュラム」として社会科は、元来児童の社会生活を生き生きと発展させる生活指導を主眼としたものであるべきだが、ともすれば学習の対象が社会時象であるというのみで、真に生き生きとし、自己の生活を向上させるような活動には乏しい、とした反省の上に立って改善がはかられた。

例えば火事の統計を写してきて、表にし、発表したり原因を考えたりする学習はいずこも同じにやっているが、これによって児童の防火消火の生活は真に向上されているだろうか。私はむしろ火の用心のために、子どもたちが自活活動として村や部落を巡視して、村の人々に働きかけ、そこで体験したことを学習してより火災に対する生活をたかめ、更には、防火の演習をよりよく実践することを取りあげたい。こうしたことは、知的に社会科を研究させる傾向を強くし、ともすれば社会科が机上の学習、言語の学習に陥っていないであろうか。我が校においては、かかる反省に立ち、真の社会生活・児童生活を生活させ、その課題を自ら解決する立場に立って学習が進められるような活動カリキュラムを構成した。従って各学級の学習活動が児童の切実な要求・興味・目的に出発するために、極めて活発に行われるようになった



ことを喜んでいる。

こうした取り組み例は、脱机上の学習、脱言語の学習によって、子ども自らの活動行動によって、自らの力で生活に踏み出し、問題解決学習へと向かわせるものであるといえよう。また、時間数としては、文部省より社会科として1週4～5時間が定められているのに対し、1週約12時間を生活単元学習に割当てている。つまり、そこには従来の社会科の時間、理科の時間、家庭科の時間の大部分、他教科の時間数から生活単元学習の中に包含され得る時間を合計して考えられたものである。よって平均して毎日2時間、生活単元学習に割当てられることになり、それを学習内容に応じて柔軟に運用されたのである。それによって、生活の中心を推進する学習に時間を多くかけて、社会科そのものが要求する新しい教育の実践をめざしたのである。

単元としては、1ヶ月50時間を要するものもあり、23日で完結する（主として低学年の行事的な単元に多い）小単元も配列し、生活の現実とその価値に応じて、無理のない、こだわらない立場に立っている。従って時事問題、日常生活上の問題等も適宜とりあげ得る余裕を残している、としている。

教科書の扱いについては、次のような方針で臨んでいる。

生活単元学習では、教科書はそれに即して編纂すべき性格のもので、我が校では許されるならば、数種のものを持ち、又多くの参考書を用意して、必要に応じて教科書が真によい参考書としての価値を発揮するようにしたい。故に我が校では、①教科書は重要な参考書の一つとして取扱う。②教科書は過渡期として、多く利用するが、その順序は変更して単元に即したものを豊かにとり入れている。③算数の題目は殆ど他におきかえられるものであるために、単元学習の生活事実に即して学習をさせる。系統を追ったものの外は殆ど順序は変更している。

こうした方針は、教科書に書かれた内容の説明から入り、その理解と確認によって進められる授業とは本質的に異なった学習形態が、教科書そのものの扱いにも反映されているといえよう。学習主体者はあくまでも子ども達であり、その活動、思考を補助、支援するものとしての一教材として教科書は存在して

いるのである。

また、他教科との関連として苦心されたものとして、「教科学習と基礎学習カリキュラム」があった。つまり、基礎学習を3種類に分けたのである。

(1) 別体系で学習することがよいと思われるもの (2) 生活単元学習のドリルとしてのもの (3) 生活単元学習から連関して発展して学習するもの である。

「従来の教科学習と相違する点もあって」、「文部省の教科書に代わる児童能力の調査が十分に行われていないため（調査研究中）全く生活単元学習と関連のない教科もとり入れて、国語・算数の系統学習ができるように仕組んだ」という。

カリキュラム実践の反省としては、「短い期間の実践の反省であるが、何よりも目立つことは、児童の活発な学習であり、主体的活動である。」又、それだけに教師の努力も多く要求されるが、「教師もそこに生きがいをもつ」ことを評価している。と同時に、「生活単元学習は適切なものができたと思うが、基礎学習は、その各々について、社会的要求と児童能力への即応が未定である。これは我々が更に進んだ研究をすべき分野であり、又そのために、実践家の研究調査の集積が要請されるのではなかろうか」と、大玉氏は記し、基礎学習の研究が十分でないことを今後の課題として残したのである。<sup>6)</sup>

これまで考察してきた「生活のための活動カリキュラム」をさらに具体的に理解するために、次に、当時実践された生活単元学習の各学年における一年間の学習題目を示す。

また、生活単元学習の具体的な実践内容を理解するために、4年生の12月における生活単元学習題目としての「共同募金」について、その目標設定と、実際の展開をたどってみることにする。

#### 生活単元学習「共同募金」の目標

- 気の毒な人々への同情をたかめ、その人たちへの救済の態度を養う。
- 慈善事業施設について、その意義を理解し、社会全体として助ける義務を感じさせる。

生活単元学習題目一覧表

1	12	11	10	9	7	6	5	4	月 年
<input type="checkbox"/> お正月 <input type="checkbox"/> 電車ごっこ	<input type="checkbox"/> おともだち <input type="checkbox"/> おとうさんおかあさん <input type="checkbox"/> おたんじょうかい <input type="checkbox"/> 来い来いお正月	<input type="checkbox"/> えんそく <input type="checkbox"/> 山あそび <input type="checkbox"/> おてがみごっこ	<input type="checkbox"/> ガッコウごっこ <input type="checkbox"/> うんどうかい <input type="checkbox"/> みせやごっこ	<input type="checkbox"/> てんらんかい <input type="checkbox"/> ままごとあそび <input type="checkbox"/> お月見	<input type="checkbox"/> 七夕祭 <input type="checkbox"/> 火あそび	<input type="checkbox"/> よい子のくらし <input type="checkbox"/> 丈夫なからだ	<input type="checkbox"/> こいのぼり <input type="checkbox"/> 私たちのお花ばたけ <input type="checkbox"/> 私のもちもの	<input type="checkbox"/> たのしい学校	1
<input type="checkbox"/> 私のおうち <input type="checkbox"/> 冬のくらし	<input type="checkbox"/> おかし工場 <input type="checkbox"/> 早くこいお正月	<input type="checkbox"/> 秋の山あそび <input type="checkbox"/> 動物園	<input type="checkbox"/> ゆうびんごっこ <input type="checkbox"/> でんわあそび	<input type="checkbox"/> 夏休みてんらん会 <input type="checkbox"/> おたんじょう会	<input type="checkbox"/> 魚とり <input type="checkbox"/> 海べのあそび	<input type="checkbox"/> 私のからだ <input type="checkbox"/> 季節だより	<input type="checkbox"/> 学級園 <input type="checkbox"/> 学校のいきかえり	<input type="checkbox"/> 二年生になって <input type="checkbox"/> 春の野あそび	2
<input type="checkbox"/> お正月会	<input type="checkbox"/> 家	<input type="checkbox"/> 阪急電車 <input type="checkbox"/> 電気あそび	<input type="checkbox"/> 虫ぼし <input type="checkbox"/> 配給ごっこ	<input type="checkbox"/> 住吉水道 <input type="checkbox"/> かべ新聞	<input type="checkbox"/> 六甲山 <input type="checkbox"/> 海水浴	<input type="checkbox"/> ゆうびん局 <input type="checkbox"/> いもつくり <input type="checkbox"/> あひる	<input type="checkbox"/> 私たちのからだ <input type="checkbox"/> たのしいあそび	<input type="checkbox"/> 自治会 <input type="checkbox"/> 上手なべんきょう	3
<input type="checkbox"/> 購買組合 <input type="checkbox"/> たのしい家	<input type="checkbox"/> 火事と消防 <input type="checkbox"/> 共同募金	<input type="checkbox"/> 有馬遠足 <input type="checkbox"/> いねの取入れ	<input type="checkbox"/> 汽車のたび	<input type="checkbox"/> 神戸港と船	<input type="checkbox"/> 学級文庫 <input type="checkbox"/> 夏の空	<input type="checkbox"/> 住吉川 <input type="checkbox"/> 稲のさいばい	<input type="checkbox"/> 健康なくらし	<input type="checkbox"/> 学級新聞 <input type="checkbox"/> うさぎの世話	4
<input type="checkbox"/> 酒倉	<input type="checkbox"/> 警察と裁判所	<input type="checkbox"/> 中央市場	<input type="checkbox"/> 日本の米 <input type="checkbox"/> スポーツ	<input type="checkbox"/> 寶塚動植物園 <input type="checkbox"/> 家庭の道具	<input type="checkbox"/> 図書館	<input type="checkbox"/> このごろの天気	<input type="checkbox"/> 養蚕 <input type="checkbox"/> 甲南病院	<input type="checkbox"/> 少年赤十字 <input type="checkbox"/> 新聞	5
<input type="checkbox"/> 議会	<input type="checkbox"/> 映画	<input type="checkbox"/> 東西めぐり <input type="checkbox"/> 修学旅行	<input type="checkbox"/> 放送	<input type="checkbox"/> 観光日本	<input type="checkbox"/> プラネタリウム	<input type="checkbox"/> 海と船	<input type="checkbox"/> 生活の改善 <input type="checkbox"/> 健康生活	<input type="checkbox"/> 私たちの学校	6

- 自己の生活を反省し、不平を言わず父母に感謝する気持ちを起させる。
- 幸福とはどんなものであるかを考え、物質的なもののみで考えない態度を  
培う。
- 知らないお友達と仲よくできる態度を養う。
- 色々な表現、運動を通じてゆたかな芸術的表現力をつける。
- 慈善事業につくしている人々の苦勞を理解し、感謝する。
- 同情と表現の世界に遊び、紙細工による表現態度能力を養う。
- 慈善事業につくした人の美しい心に感銘し、これに協力する態度を養う。

#### 生活単元学習「共同募金」の展開

- 共同募金をしているのをみたこと、又は自分も感じたことについて話合う。
  - ・ どうしてするのか
  - ・ きのどくな人たちについて話合う
- きのどくなお友達をなぐさめてあげよう
  - ・ お見舞の用意
  - ・ 手紙、慰問の品の準備、ことば、劇、紙しばい、音楽、運動等の用意
- 学校で共同募金をする
- 信愛学園のお友達をお見舞する
  - ・ 生活のしかたを見聞する
  - ・ お友達を慰問する
- 生活の反省
  - ・ 慰問の感想発表（作文）
  - ・ 自己の幸福を考え、父母のありがたさを感じる。
  - ・ 「幸福」の文をよむ
  - ・ きのどくな人へのなぐさめ方と、部面を考える
- きのどくな人への私のねがい
  - ・ もっとよくしてあげられないか相談する
  - ・ きのどくなお友達の楽しい家をつくろう

- ・建築の設計—お友達のことを考えて
- 模型づくり
  - ・共同作業でお友達の学園をつくる
  - ・必要な楽しい施設の実現
- かねのなる丘の劇について話合う
- 戦災孤児に対する世界の暖かい心やりを知る
- 慈善事業につくした人の話を聞く
- ヘレンケラー博士のことをしらべる

終戦直後の日本社会の混乱の中で、子ども達にとって、戦災孤児の存在は身近な、まさに現実の問題であったはずだ。「共同募金」というテーマを通して、その事実を全身全霊で受けとめる努力がなされている。自分に何ができるかという問いかけから発し、慈善事業の意義、恵まれた立場の認識と、父母への感謝と自己反省の上に立った幸福観の追求や、共同学園模型の製作へと発展するものである。子ども達に身近なテーマを設定し、それを通して、子ども達の心と活動力を磨き、社会認識と自己表現力を多角的に養っていることがよく理解されるのである。

4年生、12月における生活単元学習の内容は以上の通りであるが、もう1本の柱としての基礎学習の内容は次のようになっている。

#### 基礎学習

- 国語 幸福 ○真の幸福の探求、○物資でない、心の持ち方 ○温い心 ○中心思想の把握 ○心とことばのつながりの理解 ○物語の読破
- 算数 わりざん ○被除数の最後に零のつく数の割算 ○除数被除数の最後に零のつく数の割算
- 技術 募金ポスター、慰問作品 ○色々の材料をつかって工夫創造する態度を養う。

模型づくり○紙細工による表現になれる○共同製作の態度になれる

- 音楽 村のかじや ○二部分形式の理解 ○軽快なリズムの感想 ○全音符，二分音符，四分音符，八分音符，十六分音符の総まとめ

体育 鬼ごっこ 子殖し鬼

凍傷予防 ○手をこする ○ポケットに手を入れない ○掃除の後、手をよくふく

このように、基礎学習の内容としては、生活単元学習と関連したものが多く見られる。こうした教科毎の学習を、単元学習から独立させることにより、反復練習と、拡充と、系列的付加が実現されるのである。

## 第2章 「コア・カリキュラム連盟」での、附属住吉小と附属明石小の活動

附属住吉小が、「生活単元学習」を実践するようになった過程については、既に明らかにした。その計画の「根本的立場」の項に、「社会科と理科を中核としたコア的色彩の強いもの」、「社会科教育の趣旨をより効果的に生かすもの」という表現があった。このことから、附属住吉小のカリキュラムは、従来の教科カリキュラムから脱し、コア・カリキュラム化することを必然と捉えたことが分かる。

当時、「教科組織内で新教育を推進すべきか、教科組織そのものに再検討を加え、コア・カリキュラム方式によるべきか」は、全国で切実な問題となりつつあった。この動きの中で、コア・カリキュラムとして研究実践し合う民間教育団体が設立されていく。

こうして、「コア・カリキュラム連盟（コア連）」が、昭和23年10月30日に、東京で発会することになる。（於：東京高等師範学校附属小学校）当時の委員長は、石山脩平 東京文理大学教授、副委員長は、梅根悟 東京文理大学助教授、重松鷹泰 奈良女子高等師範学校附属小学校主事、和泉久雄 千葉県北条小学校教諭であった。

附属住吉小は、コア連発会時には入会していない。しかし、コア連発会2ヶ月後の昭和24年1月1日に発刊されたコア連の月刊機関誌『カリキュラム』創刊号では、「単元の計画と実践」欄で、附属住吉小の六年生の実践として「議会」の学習がとり上げられたのである。<sup>7)</sup> 次頁にその実践計画表を示す。

六年の単元 議 会（一月） 兵庫師範男子部附属小学校

単元		目 標		生 活 単 元		開 習		国 語		基 礎		技 術 学		音 楽		体 育	
議 会		○日々の生活の上に起つて来るいろいろな事柄をどういふ風に解決していくか 子ども自身のもんだい、学級のもんだい、更に学校のもんだい、郷土社会のもんだい、これらのものを通じて、もつともよい方法はどういふ方法があらうか 常に大勢の人々の意見を反映させて、よりよい結論を求めていくことであることを認識させて、おぼろげ乍らも國家政治機構やその諸もんだいにまで関心を深めていくようにする		○憲法について話合ふ ・どんなにして出来るか ・どういふ点に特長があるか ○議會について ・どういふ使命をもっているか ・どういふ構成であるか ○選挙について ・民主国民としての心得やその生活のあり方について研究 ・正しい選挙の仕方について ○我國の政治の変遷史の研究 ・昔からの政治形態を年代順に調べてみてどれだけ民の声がとりあげられていたかということを調べてみる ○討論會 ・私たちの学校の学習と相まってどんなにすれば私たちの級を、学校を立派にできるかという様な点について考える ・自己の意見を率直に発表すると同時に他人の意見にも率直に耳を傾ける ・論文、この級をよくするにはどうすればよいかを作製、批判しあう ○よい指導者指導されるものの特性について考える ・自治会の活動を中心にしてめいめいの立場を反省してみる ・民主的な生活のあり方にまで及ぶ ○縣会を見学する ○政治機構の大略を研究する ・國家地方自治体の機構 ・官庁の種類とその仕事の大略について研究する						算 数 おもしい計算の方法 151~156 ・二捨三入 ・概算 ・末位が5である数についてのかかけ算		冬休作品鑑賞會 粘土で花びんをつくる		音 楽 船出 ・初めの弱起の八分音符が短くならないよう ・はり切り過ぎてどならぬよう ・変ロ長調の終止形合唱と連絡 友情 ・八分の六拍子練習 ・四段の歌い方に注意 ・符と十六音符からなるリズムを正しく		体 育 腕立跳越 ・斜開閉脚 ・跳越 ・垂直跳の要領 縄跳 ・二回跳 ・短縄で長縄を跳ぶ 皮膚の鍛錬と呼吸器の衛生 鬼ごっこ 子取鬼 山登り ・耐寒訓練 ・長距離の走り方	

このように附属住吉小は、この前年、昭和23年11月4～6日に開かれた「全国社会科研究協議大会」で発表を行っていたが、それに引き続き、コア連においてその研究成果が注目されたのであった。

ところで兵庫県とコア連の関係は、これを機にさらに発展していった。兵庫師範女子部附属明石小も、早々とコア・カリキュラムとしての「明石附属小プラン」を発表し、コア連の旗手となっていき、昭和23年11月29、30日に、コア連との共催で「全国コア・カリキュラム研究協議会」を開いた。コア連盟側からは梅根、重松両副委員長、海後勝雄幹事長、樋口澄雄、金子孫市両常任委員が出席した。参加会員は1800名を数え、『カリキュラム』創刊号に大会の報告記事が掲載された。この研究協議会は以後も、コア連との共催で、加盟校で開かれてゆくこととなった。<sup>8)</sup>

当時附属明石小には、大正期から奈良女高師附小の木下竹次主事と共にわが国の新教育を開拓した、及川平治主事の「分団式動的教育法」実践の伝統があった。そのため附属明石小は、戦後先駆的な活動に入り易かったともいえよう。

『カリキュラム』の連載として「学校めぐり」の記事があったが、創刊号には奈良女高師附小が、そして第2号には兵庫師範附属明石小がとり上げられた。<sup>9)</sup> このように兵庫県においては、兵庫師範男子部と女子部の両附属小学校がともに全国の新教育の先駆校となり、互いに切磋琢磨したのであった。

この時期には全国的にみて、コア・カリキュラムに定式はまだできていなかった。先駆者としての苦しみは大きいが、創り出す悦びがあったのではないだろうか。直面した問題、苦悩した課題を拾ってみよう。

1. コア単元は社会科でよいか。別の原理で組まねばならないか。
2. 基礎的な練習教材について
  - ・コアとどう結びつくか
  - ・結びつく場合は国定教科書をどう扱えばよいか
  - ・基礎教材を独自の立てるとすると、標準はどこに求め、どんな調査をしたらよいか
  - ・周辺教科はどのように分けるか
3. 時間割の最も合理的な組み方はどういうものか。
4. アメリカではどのように行っているか。



5. 「コアでないと、本当の新教育はできない」と言えるのか。理論的根拠はどこにあるか。

6. コア・カリキュラムでは、基礎練習に欠陥が生じないか、不安がある。

7. むずかしい。普通の教師の能力、一般の公立校の実践力で耐えるか疑問だ。

ちなみにコア連の副委員長の重松鷹泰氏は「奈良プラン」の作成者であったが、コア連の中で、「奈良プラン」について「コア・カリキュラム」とする見方があるため、重松氏は反論した。『『コア・カリキュラム』を『コアのあるカリキュラムのことだ』とするなら、『奈良プラン』にはコアがないから、コア・カリキュラムではない。』と力説したのである。「奈良プラン」では、総合単元問題解決学習の<しごと>の生活と、各種能力を集中的、系統的に練磨する<けいこ>の生活と、日常の学級や学校の生活をつくり出す<なかよし>の生活が鼎の脚として揃う必要があるからである。三脚のバランスがとれてこそ力を発揮するのであるから、「中心はない」としたのであった。<sup>10)</sup>「生活単元学習」においても、コア学習と他学習とのバランスについて大いに苦心されたことが理解されるのである。

### 第3章 「近畿新教育実験学校協議会（K.T.S.A）」での附属住吉小・中学校の活動

附属住吉小の沿革において、前稿では「昭和22年、近畿モデルスクールに指定される」と記されているが、それは公式には近畿新教育実験学校協議会（K.T.S.A）に参加することを意味した。一般にはモデルスクールとも呼ばれ、そのようにCIEによって指定された。さらに指定された学校が集まり、実験学校にふさわしい学校の選定基準を話し合って作成したのである。

また、「モデルスクール」という呼称は、最初の会合（昭和22年1月15～17日）で「モデルスクール打ちあわせ講習」（於京都新聞社2階）として使用され、委員長は1月25日に決定された。指定を受けた学校は、CIEの指導のもとに、近畿の新教育普及徹底のモデル校となった。また、CIEとの関係もあって、下程勇吉 京都大学教授が会の中心的指導者となった。

発足当初の参加校は、次の通りであった。

・兵庫師範男子部附属住吉小学校　・兵庫師範男子部附属住吉中学校　・京都師範女子部附属桃山小学校　・京都市立生祥小学校　・京都市立桃園小学校　・和歌山師範附属小学校　・和歌山師範附属中学校　・奈良女子高等師範附属小学校　・大津市立中央小学校　・岸和田市立城内小学校　・福井県今立郡惜陰小学校

なお福井県は当所、軍団の関係で近畿に入っていた。

こうして選出された実験学校は、各々の府県内に実験学校をつくって、新教育の拡充に努めていくのである。

附属住吉小は、昭和22年に実験学校に指定された後、昭和32年まで会の活動を続けた。この間、教育界も変化し続けた。

昭和30年代になると、経験主義の新教育は批判されるようになり、系統主義の教育へと移る。よってK.T.S.Aも締めくくることになる。当時の委員長は、附属住吉中学校長の吉川貫一氏であった。そして十周年記念事業として『新教育十年一回顧と展望』を企画刊行したのである。編集は、下程氏が責任者となり、委員は山田義信、水谷悦夫、長岡文雄の3氏であった。

下程氏は刊行著中の附属住吉小の研究稿について、同著中に次のような評価をした。

第九項は、神戸大学教育学部附属住吉小学校の「生活単元学習の展開」である。新教育の根本問題をめぐる経緯をこれくらい生々しく物語る記録は、他に多くないであらう。これは新教育十年史としても極めてすぐれたものである。一編は次の編<sup>11)</sup>とともに、日本の教師がどこまで考えるようになったかを示すバロメーターである。素直に自分の頭で考えるものは強いのである。

しかし、日本の教育界においては、どうもジャーナリスト・進歩的文化人・教育学者・組合員・教育長・指導主事等にかかわって考えてもらう人々も多いようである。そんな人がいくら進歩性や近代性を誇称したところで、そこにはいわゆる“封建的”な二宮尊徳を笑殺する権利などあるべくもないだろう。何はともあれ、自分自身の胸で感じ、自分の頭で考え、自分の手足で動

いて行く主体的な人間にならぬ限り，進歩的でも近代的でもあり得ぬのである。<sup>12)</sup>

世の中も，教育界も終戦直後の事情と十年後の事情とでは，大きく変化しているが，一般的には，主体性の欠けた教師が確かに多かったと思われる。戦中の教育が影響していると考えられる。その点でも，附属住吉小の実践的姿勢は立派であった。なお，K.T.S.Aは初期において，機関誌『実験学校』を発行し，研究内容を発表し合ったのであった。

#### 第4章 終戦直後の附属住吉小学校の新教育に学ぶ

ここで，附属住吉小によって編み出された教育が示唆するものを挙げてみることにする。

1. 敗戦，激動の時代を，わが国の再建を願い，自主的・創造的に生き抜く教師，学校
2. 「現実の子どもをもっと大事に」「子どもの生命を育てなければ」という人間観，子ども観，教育観に徹した実践
3. 附属校として実践研究に熱中し，協力を惜しまなかった教師，学校
4. 旧教育を批判し，教科カリキュラムから経験主義に立つ生活単元学習＝総合学習・問題解決学習を開拓した創造的歩み
5. 占領下にあり，ヴァージニアプラン，カリフォルニアプランなどの直訳的導入が盛んになる時代に，納得を求めて自らの教育実践を拓いていく姿勢
6. 基礎的能力の陶冶について配慮を怠らなかったこと。一貫的，統一的計画のカリキュラム構成に苦心した歩み
7. 戦後早々に，全国社会科研究協議会において研究発表し，さらに『カリキュラム』誌創刊号に発表するなど，わが国の新教育実践の先駆をなした業績
8. 近畿新教育実験学校に指定され，新教育の普及徹底に尽力した業績

今日わが国では，「総合的な学習の時間」を小・中・高等学校に新設して，21世紀の教育改革を行っている。教科のあり方も旧来のままで済むことはない。

その模索の中で、戦後の附属住吉小の業績に学ぶことは多い。特に「生活単元学習」は示唆に富んでいる。

本論文では終戦直後を、昭和23年までとした。終戦の混沌から立ち上がる3年半が特に貴重と考えたからである。昭和24年に入ると、研究校は一応まとめた著述を公刊する。

附属住吉小は、昭和24年度の「研究概要」を、K.T.S.A機関誌『実験学校』第2集（昭和24年）において、次のように報告している。

1. 生活単元学習における基礎的方面の充実を図り、生活の具体に即しつつ然も広い教養と人格を拓ける広領域化の研究
2. 児童の興味と意欲に即した生活的な学習展開の工夫
3. 今日の訓育の課題の解決

以上は同年度一学期中に一応研究の完成を見、研究冊子「生活単元学習と基礎学習」を発行した。

次は二学期以後の研究課題である。

4. 生活単元学習の実践研究を通じて
  - (1) 基礎系列の再検討
  - (2) 資料単元の研究整理
5. 児童個々に徹するガイダンスの研究と実践
  - (1) 調査、測定、記録の方法の研究と実践
  - (2) ガイダンスの各方面にわたる研究と実践、或は特定児童を捉えての指導の実践研究

昭和24年度に入ると、戦後の研究は「一応完成」と見て、さらに「生活単元学習における基礎的方面の充実」に努める。実践研究を通じて、既研究の再検討に入る。

なお、迫られる人格形成、ガイダンスの課題に取り組み、特に「個々の児童に徹するガイダンス」「特定児童を捉えての指導」をめざしていくのである。

本論文の終わりに当たり、終戦直後の附属住吉小が、わが国の新教育を先導したことをさらに確認しておきたい。「総合・合科学習」の理論研究家である

今野喜清氏は、論文『総合・合科学習はどう論じられ、展開してきたか』において次のように述べている。

「近代カリキュラムの整備・展開過程ではさまざまな観点からの『合科』や『教科の統合』への努力が試みられた。」<sup>13)</sup>

こうした近代カリキュラム論の系譜と、実験学校での先駆的实践を経て、総合・合科学習論は敗戦直後、“自主的学習”の名で“討議法”，“プロジェクト・メソッド”，“ドルトン・プラン”などの学習形態を生み出すことになった。これらの戦後の最も早い時期に見られる総合学習形態は，“自学主義”にもとづく学習形態と、内容組織・構成における“生活主義の主張”として出現した。

例えば、兵庫師範男子部附属国民学校『新教育の実践』（昭和21年）では、「総合学習」は“生活学習”と同義と解釈され、「ドルトン案を加味せる自学指導」「分団学習」「プロジェクト法」などと同様の学習形態として位置づけられている。

21世紀を迎えた今日、「生きる力」の育成を掲げた教育改革、それはある意味では子どもひとりひとりに目を向け、子ども自身が自らの考え、判断で立ち上がる力を支援しようとしている。戦後の急速な経済発展、社会の複雑化に合わせるように大人の考え方や生活活動も変化して来た。機械化、科学化が生活体系に波及し、便利さの名の下に人間を支配するようになり、社会組織の肥大化の中で、人々は社会秩序の中に自らを埋没させていった。こうした経済が発展する社会の中で、人間はイニシアチブを失い、人間本来の力は弱まってきたのではないだろうか。社会発展と便利さの名の下に、大人達は自ら考え、行動したその結果としての生きる手ごたえが得られなくなってきたのではないだろうか。大人たちがこうした生きる姿勢を子どもたちに伝えられなくなった現在こそ、教育の中において、あえて日々の生活を見つめ、考え、行動する充実感を、生きる手ごたえをつかませてやらねばならないのではないだろうか。

あたかも経済社会が行きづまり、社会機構が優先性を失いつつある今日、社会のひずみを越えて人間本来の力を再生するためには、まさに戦後期と同様に、まず何よりも子どもを見つめてやり、日々を生き生きと、前向きに生きること

ができるようにしてやらねばならない。そうした意味で今日の教育改革は、教育のルネッサンス期と言えるであろう。

附属明石小は、戦後の焼け跡の中で、まず子どもを大切にすることから始め、「生活単元学習」を確立していった。子ども自らが生活を見つめ、日々の生活を主体的に生きることを可能にする、こうした教育創生の貴重な試みは、今日の教育実践に多くの示唆を与えてくれるのである。

#### 注釈

- 1) 『第二次世界大戦直後の新教育「生活単元学習」－神戸大学発達科学部附属住吉小学校－の開発(1)』 横山ひろみ 神戸親和女子大学研究論叢第34号 2001.3.
- 2) 『教育方法論Ⅰ 教育実践』 重松鷹泰 明治図書 1975 14～18頁
- 3) 『たしかな教育の方法』 奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会 秀英出版 1949.5.
- 4) 『生活カリキュラム構成の方法』 文部省教科書局実験学校連盟 六三書院 1949.6.
- 5) 『コア・カリキュラムの研究』 山崎喜与作 社会科教育研究社 1948.11.
- 6) 『全国社会科研究協議会発表要項及資料』 3～9頁
- 7) 『カリキュラム』 創刊号 コア・カリキュラム連盟編集 誠文堂新光社 1949.1.
- 8) 同上「全国コア・カリキュラム研究協議会の記」12～13頁
- 9) 同上 33頁
- 10) 『学習研究』 奈良女子高等師範学校附属小学校学習研究会 1946.6.「生活を統一するもの」2～7頁
- 11) 『新教育十年－回顧と展望』 下程勇吉編 黎明書房 1957.「京都師範女子部附属桃山小学校」の項
- 12) 同上 14～15頁
- 13) 「総合・合科学習はどう論じられ、展開してきたか」 今野喜清『社会科教育』259号 1984.7. 26頁

#### Abstract

After the Second World War, new methods of education for children were searched in Japan. We study here one of them, "Seikatsu

tangen gakushū” developed at Sumiyoshi Elementary School attached to Kobe University, considering its contents and influences on today’s reform in the educational system.